「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト

令和４年度　社会科 授業づくり講座　レポート

拠点校：高知市立大津中学校

発　　行
令和５年３月
高知市教育委員会学校教育課
学力向上推進室

「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト事業　令和４年度　授業づくり講座」では，学習指導要領が目指す授業づくりを推し進めるとともに，日常的に授業研究に取り組む風土づくりを行い，自ら学び続け，共に高め合う教員の育成を目指し，拠点校を会場に教材研究会・授業研究会を１セットとし，年間２セット実施します。高知市の中学校社会科の拠点校である大津中学校の第１回教材研究会（５月23日実施），第２回授業研究会（６月15日実施）における本単元の学びの様子を紹介します。

単元名　歴史的分野　現代の日本と世界

学習指導要領解説 P.117～121

単元目標

○　第二次世界大戦後の諸改革の特色や世界の動きの中で新しい日本の建設が進められたことを理解する。
○　国際社会において我が国の役割が大きくなってきたことを理解する。【知識及び技能】
○　これまでの学習を踏まえ，歴史と私たちのつながり，現在と未来の日本や世界の在り方について，課題意識をもって，多面的・多角的に考察，構想し，表現する。【思考力，判断力，表現力等】
○　歴史と私たちのつながり，現在と未来の日本や世界の在り方について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究，解決しようとしているとともに，公民的分野へのつながりを見いだす。【学びに向かう力，人間性等】

小学校　学習指導要領解説 P.123
イ（ア）世の中の様子，人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して，我が国の歴史上の主な事象を捉え，我が国の歴史の展開を考えるとともに，歴史を学ぶ意味を考え，表現すること。

中学校　学習指導要領解説 P.118
イ（ウ）これまでの学習を踏まえ，歴史と私たちとのつながり，現在と未来の日本や世界の在り方について，課題意識をもって多面的・多角的に考察，構想し，表現すること。

ゴールの子供の姿

小・中学校の歴史学習を踏まえ，現在も残る様々な課題について多面的・多角的にとらえ，それらの課題を追究・解決していく中で歴史を学ぶ必然性，必要性についての考えを深める。そして現在と未来の在り方について，課題意識を持ち，考察，構想し，表現する力を身に付ける。

現状（課題）の把握

本単元における現状（課題）
①　小学校の学びの把握ができておらず，小学校の学習を繰り返している場面がある。
②　現代日本や世界の学習について，公民の学習と兼ねることが多く，歴史に関わる事象などの意味や意義などを，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したりすることが不十分である。

授業改善のポイント

● **小中の系統的な指導の在り方を意識する**
小学校で身に付けた資質・能力を生かし，中学校の社会科の学習へとつながる授業づくりを行う。

● **学習過程の見直し**
学習指導要領で示された資質・能力を育成するために「課題把握⇒課題追究⇒課題解決」の学習過程を意識した単元構想を行う。また，歴史的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり，解決したりする活動の充実を図る。

単元構想

単元を貫く課題　第二次世界大戦後，世界は平和になったと言えるのか

課題把握
1　民主化政策によって日本はどのように変わったのだろう。
2　日本国憲法の制定により，日本はどのような民主主義国家になったのだろう。
3　冷戦は世界にどのような影響を与えたのだろう。

課題追究
4　なぜ，GHQは占領政策を大きく転換したのだろう。
5　なぜ，インド，ビルマ，ソ連，中国は日本との講和会議に不参加や反対をしたのだろう。（本時）
6　なぜ，日本はベトナム戦争を支持し，またどのように関わったのだろう。
7　アメリカ・韓国・中国と日本の関係で，今日まで残された課題とはどんなことだろう。
8　石油危機によって，日本の政治や経済はどのように変わったのだろう。
9　国際社会の中で，日本が果たすべき役割とはどのようなことだろう。
10　バブル経済の崩壊によって，日本経済と政治体制はどのように変化したのだろう。

課題解決
11　国際社会の中で私たちはどのようなことができるだろう。

各時間の学習が「単元を貫く課題」につながるように設定

本　時　の　展　開

インド，ビルマ，ソ連，中国などが，日本との講和会議に不参加や反対したことを確認する。

インド・ビルマ・ソ連・中国が日本との講和会議に不参加や反対した理由を考える。
- 様々な資料から必要と思われるものを取捨選択し，冷戦と関連させて考察する。
- ジャムボードを活用して，資料を選び，付箋に理由を書かせて，グループで共有する。

日本の独立後，日本に残された課題について考えを深める。

まとめ　本時の振り返り

資料から本時の課題に関わる情報を収集し，適切に読み取っている。【知識・技能】

講和会議に参加しない国や反対した理由を諸資料を基にして多面的・多角的に考察し，根拠を示して説明している。【思考・判断・表現】

教材研究会　５月23日（月）

協議の視点
1．単元を貫く課題と各時間のつながりが見えるものとなっているか。
2．本時の目標に向けて，指導と評価の一体化を図る授業展開になっているか。

講座では，学習指導要領を踏まえ，資質・能力を育成するための授業づくりを具体的に考えていきます。

協議の視点１について

【良い点】「平和になったと言えるか」という問いは子供たちが毎時間の学習の中で，単元を貫く課題に結び付けやすく，各時間の学習ごとに単元を貫く課題に立ち返ることができる。
【改善点】・「平和」という言葉の意味は広く，人によって捉え方が違う。「平和」の言葉の捉えが明確ではない。
・「平和と言えるか，言えないか」を判断させるための学習活動が不十分である。
・学習指導要領には「国際社会への復帰を基に」とある。日本の国際社会復帰までの歴史的経緯に着目する必要がある。

➡ **歴史的経緯に着目し，考察，構想し，表現することができるように単元構想を見直す。**

協議の視点２について

【改善点】・講和会議に不参加や反対した理由を多面的・多角的に考察するためには，様々な側面・立場から考える必要がある。
・資料を収集し，読み取るだけでなく，活用する場面の設定をする。

➡ **多様な視点を明確にする手立てと獲得した知識を活用する学習過程となるように見直す。**

参加者より

・先生方の様々な視点が聞けて，参考になりました。単元を貫く問いの重要性と設定の大切さを改めて感じました。自分のこれまでの実践を振り返って学ぶ点が多々ありました。
・教材研究の大切さとともにそのおもしろさを改めて考えることができました。今日の学びを自分の授業にも生かしていきたいと思います。
・学習指導要領に基づいて，他校の先生方と具体的な授業を一緒に考えていくことで，新たな視点を得ることができ，自校での実践に取り入れたいと思いました。

授業研究会　６月15日（水）

教材研究会を受けて
・単元を貫く課題
　と単元構想の見直し
・本時の問いの見直し

○　単元を貫く課題の見直し…「日本が戦後に国際地位を向上させる上で大きな要因となったできごとはどんなことだったのか？」
○　単元構想の見直し…11時間構成から12時間構成へ
　※　思考過程の可視化…ワークシートの工夫
○　本時の課題の見直し…「日本が国際社会に復帰するためにはどのようなことが必要だったのだろう。」

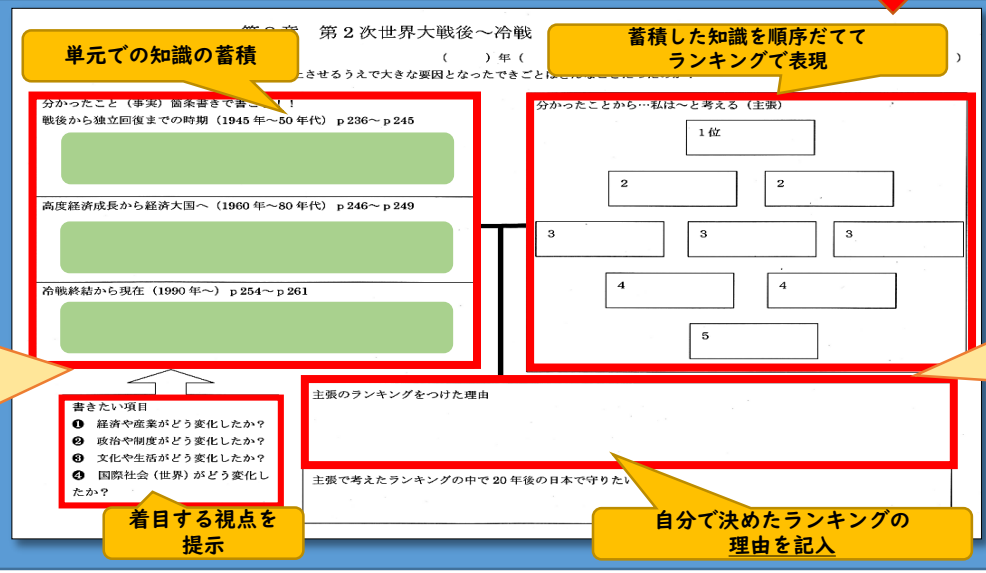
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善へ

Point①　視点の明確化

主体的・対話的で深い学びを実現するためには，「課題（問い）の追究のための枠組みとなる多様な視点に着目させ，課題を追究したり解決する活動が展開されるように学習を設計する」ことが大切です。
（学習指導要領P.83より）

本単元では

学習した歴史的事象について「経済や産業」「政治や制度」「文化や生活」「国際社会」の四つの視点から現代の日本社会を形づくるきっかけとなったできごとを単元を貫く課題を意識しながら，「A　終戦から独立回復まで」「B高度経済成長から経済大国へ」，「C　冷戦終結から現在」の３つの時期のまとまりごとの学習が終わる度に生徒は知識の蓄積をしていく。



Point②　根拠の明確化

「社会的事象の意味や意義，事象の特色や事象間の関連，社会に見られる課題などについて，考察したことや選択・判断したことを論理的に説明したり，立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習」を行っていくことが大切です。
（学習指導要領P.176）

本単元では

最後の第12次でこれまで蓄積してきたできごとの中から，日本の転機になったできごとのランキングを作る。その下にはそのようなランキングにした理由を記入する。このようにして，根拠を明確にしながら，自分の思考の過程を可視化し，論理的に説明できるよう，ワークシートにまとめる。

本時の目標
日本が国際社会へ復帰するために必要だったことを諸資料を基にして多面的･多角的に考察し,根拠を示して説明できる。

単元を貫く課題　日本が戦後に国際地位を向上させる上で大きな要因になったことはどんなことだったのか？

課題把握　第１～３次	課題追究　第４～10次	第5次　本時	～第10次	課題解決　第11・12次

本　時　の　展　開

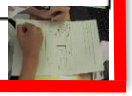
導入　問いを持つ（なぜ講和会議に不参加，反対の国があったのか）

展開　学習課題の設定 → 復帰までのできごとを教科書やタブレットを使って調べる → 復帰するまでに必要だったことを考える → 復帰までの過程の中で，どのような課題が残ったのか考える

評価①の場面
教科書や資料から本時の課題に関わる情報を収集し，適切に読み取っている。【知識・技能】

評価②の場面
日本が国際社会に復帰するために必要だったことについて諸資料を基にして多面的・多角的に考察し，根拠を示している。【思考・判断・表現】

まとめ　第１～５次までの学習の中で単元を貫く問いに対するまとめをする



協議の視点

本時の目標に向けて，指導と評価の一体化を図る授業展開になっているか。

評価①の場面について

【良かった点】
ジャムボードを班で一つ使うことで，意見の共有，発表，蓄積がスムーズにできとても効果的である。
【改　善　点】
班で共有のジャムボードに入力していたため，個人で読み取りができているかどうかの評価はできなかった。出来事を出させたいのか，語句の説明をさせたいのか，何に着目させるのか明確でなかった。

評価②の場面について

【改　善　点】
それぞれの出来事がなぜ必要だったのかを，グループで考えさせたかったのではないか。国際社会に復帰するまでに必要なことを選ぶためには，その前提としてそれぞれの出来事についてしっかり理解することが必要なのではないか。

参加者より

・　講座に参加したことで，本校における各時間の評価の設定が不十分で，生徒の学習の改善につなげることができてないと反省しました。自校でも指導と評価の計画をしっかりと立てていきたいと思います。
・　すべてにおいて本校，私自身遅れ過ぎていると反省。今日の学びを教科会で伝え，少しずつ実践していきます。

子供たちが資料を収集し，選択して，自分たちから主体的に調べていけるように仕組んだが，一枚のジャムボードで作業が進行し，「読み取っているか」を評価することが難しかった。多面的・多角的に思考・判断するためには，歴史的事象について，もっと深く理解できていたら，子供たちも価値付けができたのではないか，単元の構成から考え直さなくてはいけないと感じた。指導と評価の一体化についても，まだまだ不十分なので研究を進めていきたい。

授業者
佐竹崇志教諭